九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

四川大学古籍整理研究所の活動について ： 『巴蜀全書』プロジェクトおよび校点本『宋会要輯稿』・『廖平全集』を中心に

白井, 順
四川大学 ： 副研究員

https://doi.org/10.15017/1811123

出版情報：中国哲学論集. 42, pp.64-77, 2016-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

四川大学古籍整理研究所の活動について

―『巴蜀全書』プロジェクトおよび校点本『宋会要輯稿』・『廖平全集』を中心に―

白井　順

一、はじめに

四川地域は三星堆遺跡に代表されるように古代から肥沃な大地に恵まれ、独特の文化を形成し発展してきた。漢代景帝末年（前一四三～一四一）に蜀の太守であった文翁（四川盧江、舒の人）が中国最初の学校と言われる教育施設「石室」を開き、成都には現在でもその跡地に石室中学が建てられている。蜀は『太玄』『法言』の著者・揚雄（前五五～一八）を始め、司馬相如や王褒など詩賦の達人を輩出した土地でもある。唐代には四大都市に列せられるほど発展し、四川出身の李白は言うまでもなく、成都には杜甫など多くの詩人が居住し、宋代には蘇軾や張栻などが活躍し繁栄の時代を迎える。しかし、元の侵攻とともに崩壊し、明代には楊慎や趙貞吉・鄧豁渠などの思想家が輩出するも、明末崇禎十七年（一六四四）に張献忠の侵攻によって再び荒廃した。清代には、戦乱による人口減少を補うため、「湖広、四川を填たす」と言われるように、湖北・湖南・広東の住民が四川へ移住した。清初には唐甄（達州の人）を始め、羅江の李氏（李調元・李鼎元・李驥元）・遂寧張氏（張問陶・張問安）・新繁費氏（費経虞・費密・費錫璜）・丹棱彭氏（彭端淑・彭肇洙・彭遵泗）等の士族が輩出し、多くの著書を残した。乾隆年間には劉沅（双流の人）が出て、彼の経学

研究は槐軒学派といわれる劉咸炘・劉咸荣・劉咸焌・顔楷らに受け継がれていく。

時代はさらに下って、光緒元年〔一八七五〕、張之洞が四川に赴任し、尊経書院を設立して考証学を導入した。四川大学は張之洞が指導した尊経書院、そして錦江書院（一七〇四年、四川按察使の劉徳芳が文翁石室の跡地に創設した学校）・存古学堂を前身とする大学である。四川では文翁石室の七経教育の衣鉢を継ぐという意味で、経書の研究が発展し「近代蜀学」と言われる学風を築いた。王闓運は四川総督丁宝楨の招聘を受け、成都の尊経書院で教鞭を執った。この尊経書院は、経学研究の廖平（一八五二～一九三二）、楊鋭（一八五七～一八九八）とともに戊戌六君子で知られる変法派の劉光第（一八五九～一八九八）、蜀学会を組織し『蜀学報』を出版した宋育仁（一八五八～一九三一）などを輩出した。また、新文化運動の論客で北京大学教授にもなった呉虞（一八七二～一九四九）、政府副主席を務めた張瀾（一八七二～一九五五）、人民大学初代学長で中国革命論を記した呉玉章（一八七八～一九六六）等、みな四川出身で尊経書院に関わっている。

二十世紀に入って、文学者でもあり歴史学者でもある郭沫若（一八九二～一九七八、楽山の人）、廖平の弟子で歴史学者の蒙文通（一八九四～一九六八、塩亭の人）、経学研究の龔道耕（一八七六～一九四一）、重慶辛亥革命の指導者である向楚（一八七七～一九六一、巴南の人）、『広韻』研究で知られる趙少咸（一八八四～一九六六、成都の人）、『文心彫龍』研究の泰斗・楊明照（一九〇九～二〇〇三、大足の人）、蜀刻書研究の劉咸炘（一八九八～一九三二、双流の人）、『宋代蜀文輯存』の著者であり蔵書家として知られる傅増湘（一八七二～一九四九、瀘州江安の人）など著名な学者を輩出し、蜀学研究を振興した。ほかに、新儒家として著名な唐君毅（一九〇九～一九七八、宜賓の人）も四川出身である。

このように、文翁石室の遺沢と尊経書院という二つの志を継ぐという自負のもと、四川大学古籍整理研究所は、建所以来三十年の間に豊饒な成果を上げてきた。

二、四川大学古籍整理研究所

四川大学古籍整理研究所は、徐中舒・繆鉞・楊明照という三人の先学によってその基礎が築かれた。一九八三年七月徐中舒が学術顧問、繆鉞が名誉所長、楊明照が所長、趙振鐸・胡昭曦が副所長という体制で古籍整理研究所は発足した。徐中舒は『漢語大字典』（一九八六～一九九〇年、四川辞書出版社・湖北辞書出版社）の主編者として著名であり、これに所長・趙振鐸が関わり、『文心雕龍』研究の権威である楊明照は、胡昭曦らとともに『全宋文』編纂プロジェクトの立項に尽力した。一九八四年に蘇軾研究で著名な曽棗荘と歴史学研究の劉琳が副所長に着任したあと、尹波・王暁波・李文沢・繆文遠・馬徳富・祝尚書・羅国威・劉文剛・刁忠民・王智勇・黄錦君・沈治宏・李国玲等のメンバーで一九八五年より『全宋文』編纂のプロジェクトを立ち上げ、以来宋代研究の拠点として成果を挙げてきた。まず、一九八八～一九九四年十月の間に『全宋文』の前半五十冊（第一版、巴蜀書社）を刊行した。一九九五年五月より、舒大剛・李文沢が副所長の任に就き、一九九六年に四川大学人文社会科学研究院が設立され、古籍整理研究所もそこに所属することになった。一九九一年には大規模な宋代研究の国際会議を主催し、その後、村上哲見・筧文生の両先生が古籍整理研究所の客員研究員を務めた。当時古籍研究所に留学した日本人は、池沢滋子（現・中央大）・保苅佳昭（現・日本大学）で、日本とは宋代文学研究方面での交流が盛んであった。一九九五年以降、『全宋文』全三百六十冊の刊行を進める一方、[1]『三蘇全書』全二十冊（二〇〇一年）・『宋集珍本叢刊』全百八冊（二〇〇六年）などの大型プロジェクトに着手し、今日では、宋代研究の基本典籍の整理では他機関の追随を許さないほど確固たる評価を得ている。

現在古籍研究所にはスタッフが二十四名在籍する。その内、教授八名、副教授・副研究員七名、助理研究員五名、助教一名、科研助理二名、補助人員五名である。所長は舒大剛で、代表著作としては『中国孝経学史』（二〇一三年、福建人民出版社）があり、四川大学歴史文化学院副院長の職位にあり、国際儒学聯合会の理事でもあり、中国孔子基金会の理事の重責を担っている。副所長の尹波は、郭斉との共著『朱熹集』（四川教育出版社、一九九六年）で知ら

れる朱子学および宋代史文献の屈指の専門家であり、ほかにも『宋会要輯稿』や『曹彦約集』（二〇一五年、四川大学出版社）などを点校している。郭齊は『朱熹集』以外に、『朱熹新考』（一九九四年、電子科技術大学出版社）・『朱熹詩詞編年箋注』（二〇〇〇年、巴蜀書社）や『朱子学新探』（二〇〇八年）などを著していて、文学方面でも著名な朱子学研究者である。呉洪沢は『宋人年譜叢刊』（二〇〇三年、四川大学出版社）を始め、『全宋文篇目分類索引』（二〇一四年、四川大学出版社）・『宋代文学編年史』（二〇一〇年、鳳凰出版社）などの著作がある。王智勇は『靖康要録箋注』（二〇〇八年、四川大学出版社）や『宋会要輯稿』の食貨（一～五十）を担当するなど歴史系の古典基本書の校点に従事している。黄錦君は言語学専門で『二程語録語法研究』（二〇〇五年、四川大学出版社）などの業績があり、向以鮮は詩や芸術方面の専門家で『中国石刻芸術編年史』（二〇一五年、東方出版中心）のほかに、『唐詩弥撒曲』（二〇一四年、東方出版中心）や『我的孔子』（二〇一六年、人民文学出版社）を出版し、著名な詩人としても活躍している。王蓉貴は『中国地方志宋代人物資料索引続編』（二〇〇二年、四川辞書出版）などの工具書の編纂に携わっている。楊世文は王蓉貴との共著で『張栻全集』（一九九九年、長春出版社）を出版し、二〇一五年にそれを改訂して理学叢書として新たに単著『張栻集』（中華書局）を刊行したばかりである。出土資料および先秦漢研究が専門の彭華は『陰陽五行研究』（二〇一一年）、また舒大剛と共著で『忠恕与礼譲』（二〇〇八年、四川大学出版社）を出版している。また古籍整理研究所では、一九九〇年から『宋代文化研究』を創刊し（現在最新号は第二十一輯）、各研究員たちが宋代に関連する論文を寄稿している。

上述の四十歳代以上の研究員たちは、若手の頃から『全宋文』プロジェクトに関わり、そのプロジェクトによって育成された宋代研究或いは古典籍基礎的資料のプロフェッショナルである。次世代の人材を育成するためのプロジェクトとして、一九九七年に『儒蔵』の編纂計画が立ち上げられ、『儒蔵』というこの大型プロジェクトを運営することで資金を獲得し、四十歳以下の若手研究者たちを育てていく方針になった。また、二〇〇九年に孔子基金会から資金を得て、古籍整理研究所に付置する国際儒学院を創設し、儒学研究の拠点として人材を育成している。現在、『儒蔵』の執行役である張尚英、国際儒学院副秘書長を務める王小紅、李冬梅・霞紹暉・鄭偉・田君・戴瑩瑩・杜春雷・汪璐・

馬深・劉慧敏・秦際明等三十代の若手研究員が『儒蔵』と『巴蜀全書』プロジェクトに参画している。二〇一七年四月現在客員教授として学習院大学東洋文化研究所の王瑞来教授（宋代史研究）、その他に元・台湾成功大学所属の郭懿儀副研究員（音韻学研究）が在籍している。

一九九九年に《儒蔵》編纂は国家二一一工程の重点プロジェクトに選出され、国家九八五工程創新基地プロジェクト、二〇〇五年には中国孔子基金会重大プロジェクトとしても資金を獲得して『儒蔵』編纂がスタートした。実は『儒蔵』には三種類あり、編纂のスタンスが全く異なる。一つは北京大学が編纂するもの、もう一つは人民大学編纂の『国際儒蔵』である。四川大学の『儒蔵』は仏教の大蔵経三蔵二十四目の分類体系を採用し、史部・論部・経部に分ける。史部は雑史類・礼楽類・学校書院類・儒林史伝類・儒林年譜類・儒林碑伝類・歴代学案・孔孟史志類、論部は雑論・礼教・政治類・性理類・諸子類、経部は出土文献類・小学類・群経総義類・四書類・孝経類・春秋類・礼類・詩経類・尚書類・周易類・元典類というように、内容によって分類し、影印に点校を施す。四川大学『儒蔵』の最大の特徴はこの分類法と影印版にある。北京大学『儒蔵』ではすべて活字に起こして四庫全書に倣う方式で整理している。周桂鈿「北大本川大本《儒蔵》之比較」[2]という文章で比較されているが、両者の『儒蔵』は全く別物と言っていいだろう。四川大学『儒蔵』編纂の詳細については、『儒蔵論壇』第一輯（二〇〇六年、四川大学出版社）を参照されたい。二〇一五年に『儒蔵』史部二七四冊の刊行が完了し[3]、経部も詩経類・孝経類・三礼類が既に刊行された。

『儒蔵』プロジェクトに関連して、国際儒学院としての編纂・出版を多く手掛けるようになる。『中国儒学通案』シリーズ（人民出版社）として、孔子から晩清までの二五〇〇年に亘る師伝授受を整理し、二〇一〇年には『清儒学案』全十冊（舒大剛主編）、二〇一二年には『宋元学案補遺』全九冊（楊世文・舒大剛・邱進之・金生楊・張尚英校点）、二〇一三年には『魏晋学案』全三冊（楊世文主編）を刊行した。また儒蔵論叢というシリーズで、二〇一一年に吉林人民出版社より張尚英『宋代『春秋』学専題研究』、王小紅『宋代『禹貢』学研究』、李冬梅『宋代『詩経』学専題研究』を出版した。さらに、『二十世紀儒学大師文庫』全十二冊（四川大学出版社）を編集し、龔道耕・李澄源・張舜徽・金景芳・皮錫瑞・呉之英・劉師培など五十余人の著述を収録する。

また、四川大学儒蔵学術系列として、鄒重華・粟品孝『宋代四川家族与学術論集』（二〇〇五年）、単純『鴻爪紀学』（二〇〇五年）、廖名春『中国学術史新証』（二〇〇五年）、胡昭曦『四川書院史』（二〇〇六年）、郭斉『朱子学新探』（二〇〇八年）、などの書籍を三十種ほど刊行している。二〇〇六年に創刊された『儒蔵論壇』は毎年一輯刊行し、儒学文献・儒学思想などテーマ別に関連する文章が収録され、現在最新号（第十輯）に至っている。『儒蔵』プロジェクトは論部の刊行をもって終了する予定であるが、国際儒学院としての活動は引き続き行われるので、儒学・経学分野の研究を続ける方針に変わりはない。

四川大学は歴史文献学という博士学位が取得できる唯一の大学であるが、中国儒学学位も取得でき、二〇〇九年より納通（北京納通科技グループ有限会社）儒学奨学金を設けて儒学研究を奨励している。二〇一五年四月から古籍整理研究所は四川大学国際儒学院の名義で、貴陽孔学堂[4]の活動にも参加するようになり、昨今の国学ブームと儒商振興政策などに関連して、一段と儒学研究に拍車がかかっている。また通常の活動としても、馬一浮の復性書院に倣ったその名も復性書院という名の教堂で《儒蔵論壇》系列学術講座を不定期に開催し、既に一七七回を超えている。

その他、具体的な業績や活動については、開所三十周年を記念して出版された『四川大学古籍整理研究所建所三十年記念文集』（二〇一三年、四川大学出版社）および『考文献而愛旧邦―四川大学古籍整理研究所建所三十年』（二〇一三年十二月）を参考にされたい。

三、巴蜀全書

古籍整理研究所は次世代の大型プロジェクトとして、二〇一〇年から『巴蜀全書』の編纂に取り掛かかった。この『巴蜀全書』プロジェクトで、すでに一五〇項目以上の計画を立ち上げ、一二〇種余りの成果を出版してきた。現在、四川大学古籍整理研究所で進めている『巴蜀全書』は、巴蜀地域（重慶〔巴〕・四川〔蜀〕のこと）の『四庫全書』たるべく、歴代の巴蜀地域出身の著述、「蜀客文献」という長期巴蜀に滞在した学者の著作、巴蜀に関する地理・経典類等を集めた一大叢書である。国家社科基金重大委託プロジェクト〈10@zh005〉、四川省重大文化プロジェクト〈川

宣〔二〇一二〕一一〇号〉に選出され、毎年年間三〇〇万元（約五千万円）規模の科研費で運営しており、今後十年に亘って計画が進められていく予定である。『巴蜀全書』は大別して三部門から構成され、一は巴蜀文献精品集萃、二は『巴蜀文献連合目録』の編纂、および巴蜀文献古籍資料庫の構築、三は再造巴蜀文献珍本善本である。その他に、補助研究系列がある。既に巴蜀全書として刊行したものを挙げて紹介しよう。

一、精品集萃系列

『蘇軾全集校注』全二十冊（張志烈・馬徳富・周裕鍇著、二〇一〇年、河北人民出版社）

『蘇過詩文編年箋注』中国古典文学基本叢書（蔣宗許・舒大剛・舒星校補、二〇一二年、中華書局）

『丹鉛総録箋証』全三冊（王大淳箋証、二〇一三年、浙江古籍出版社）

『養晴室遺集』全二冊（王大厚校理、二〇一三年、巴蜀書社）

『宋会要輯稿』全十六冊（劉琳・刁忠民・舒大剛・尹波等点校、二〇一四年、上海古籍出版社）

『宋代蜀文輯存校補』全六冊（呉洪澤補編、二〇一四年、重慶大学出版社）

『穀梁春秋経傳古義疏』（鄭偉校注、二〇一四年、四川大学出版社）

『廖平全集』全十一冊（舒大剛・楊世文主編、二〇一五年、上海古籍出版社）

『華陽国志新校注』（劉琳校注、二〇一五年、四川大学出版社）

『玉田書室詩稿箋注』（霞紹暉箋注、二〇一五年、四川大学出版社）

『周詩新詮』（任乃強著、二〇一五年、巴蜀書社）

二、目録系列

『廖平著述考』（鄭偉著、二〇一四年、四川大学出版社）

『宋代蜀人著述佚存録』（許肇鼎著、二〇一五年、四川大学出版社）

三、珍本善本系列（影印）

蘇軾『東坡先生書伝』全五冊線装（万暦金陵畢氏『両蘇経解』本）蕭山古籍出版社

蘇軾『東坡先生易伝』全四冊線装（万暦金陵畢氏『両蘇経解』本）東江印務
陳田夫『南嶽総勝集』全三冊線装（宋刻本）富陽華宝斎
馮継先『春秋名号帰一図』全二冊（宋刻本）富陽華宝斎
諸葛亮『諸葛孔明心書』全一冊線装（明正德十二年韓襲芳銅活字本）富陽華宝斎
蘇軾『詩集伝』全四冊線装（南宋淳熙七年刊本）富陽華宝斎
『三蘇先生文粋』全六冊簡易製本、東江印務
『李太白詩』全八冊簡易製本（元建安余氏勤有堂刻本）福建人民出版社

四、補助研究系列

『民国時期社会調査叢編（三編）』全三冊（何一民・姚楽野主編、二〇一四年、福建人民出版社）
『巴蜀書法理論選粋』（王万洪編著、二〇一四年、四川大学出版社）
『楊慎『書品』校注評釈』（王万洪著、二〇一四年、四川師範大学電子出版社）

五、その他

『張栻集』全四冊、理学叢書（楊世文整理点校、二〇一五年、中華書局）
『巴蜀文献』第一輯（二〇一四年）、二輯（二〇一五年）四川大学出版社

この『巴蜀全書』プロジェクトの特徴は文献である。巴蜀出身者だけでなく、蜀の地に遊んだ際の紀行文や詩集は先述したように蜀客文献と言うが、蜀客文献では、越州山陰（〔浙江紹興〕）出身・陸游の『入蜀記』（夔州〔現在の重慶市〕通判に任命されて長江を遡り任地へ赴く紀行文）や『劍南詩稿』（蜀に八年間滞在時の作品がその原型、現在の『劍南詩稿』は八十五巻九千余首に上りそれ以外の詩も入っている）が代表的な作品として挙げられる。上述の諸葛亮は琅邪（山東・臨沂）が本籍地と言われ、四川出身者ではないが、劉備の参謀として活躍し、成都には武侯祠もあるので、『諸葛孔明心書』も巴蜀文献である。上述善本系列の李白（江油の人）・蘇軾（眉山の人）・蘇過（蘇軾の第三子）・陳田夫（閬中の人）・張栻（綿竹の人）など皆四川を代表する有名人物なので、説明するまでもないだろう。

『玉田書室詩稿箋注』は、四川の詩人・范問予（一九〇〇～一九六九）の詩集で、一九一七～一九六八年の五十二年間に作られた二百首であり、革命家の視点から社会の変遷を詠っており、資料的な価値も高い。『宋代蜀人著述佚存録』は、一九八六年に許肇鼎が巴蜀書社より出版したものに修訂を加え、一〇〇〇余条を補充したものである。また任乃強（一八九四年～一九八九）は南充の人で藏族（チベット）や羌族研究の先駆者である。『周詩新詮』は彼の『詩経』研究であり、文字学や歴史地理学を用いて歴史文化の視点からアプローチするものである。

『巴蜀全書』として校点本『宋会要輯稿』が出版されたのも、「巴蜀」という視点から文献を捉え直したことに起因している。これについては後述する。これまで四川大学歴史系では、巴蜀地域史の研究として、胡昭曦・劉復生・粟品孝『宋代蜀学研究』（巴蜀書社、一九九七年）、胡昭曦『宋代蜀学論集』（四川人民出版社、二〇〇四年）、胡昭曦『巴蜀歴史考察研究』（二〇〇七年）などの成果を出版してきた。また地域的な学問の特色として易学が指摘されており、巴蜀出身の北宋の陳摶、宋代に涪陵に流謫された程頤やその際に交流した譙定、また邵雍の息子で蜀に一時期住んだ邵伯温なども巴蜀地域易学を形成した人々である。邛崍出身の張行成や綿竹出身の張栻、蒲江出身の魏了翁にも独自の易学がある。明代の来知徳も重慶・梁平の出身であり、まさに「巴蜀」の脈絡にあると言えよう。今後、『巴蜀全書』のなかで別のシリーズとして「蜀学叢刊」系列が創刊される予定である。「蜀学叢刊」は、両漢（文翁石室と楊雄らの活躍）・両宋（蘇軾から張栻へ）・晩清（尊経書院）という三つの隆盛期を柱に進められている。狭義の「蜀学」といえば、蘇軾を中心とする学問で程頤ら洛学に対抗する言い方として使われるものであるが、文献という視点から広義の「蜀学」としてとらえ直そうという試みである。

このように、巴蜀地域文化の精華としての文献を総集しようというのが『巴蜀全書』の主たる目的なので、大陸では既に散逸した巴蜀文献や外国人の著述による巴蜀文献といった海外所蔵の巴蜀文献を調査する必要もあり、その調査が古籍研究所での筆者の任務のひとつになっている。

以下に、『巴蜀全書』の突出した成果というべき校点本『宋会要輯稿』と『廖平全集』について紹介したい。なお、出版物・構成メンバーの経歴・活動の詳細については、ウェブを参照されたい。[3]

四、『宋会要輯稿』

古籍整理研究所では九十年代から、『宋会要輯稿』の電子化計画をハーバード大学・台湾中央研究院と共同で進め、古籍整理研究所が校点の責務を負い、台湾中央研究院「中研院漢籍電子文献」に提供していた。二〇〇九年、上海古籍出版社との協議により精度を上げた校点整理を施し、四年がかりで進められた。校点者は劉琳・刁忠民・王曉波・李文沢・郭斉・李勇先・尹波・王智勇・呉洪沢・徐亮功・郭聴波・黄錦君・楊世文・王小紅・舒大剛の十五名である。『宋会要輯稿』（全十六冊）は二〇一四年六月に上海古籍出版社より刊行され、二〇一四年全国優秀古籍図書の最優秀賞を受賞、さらに第十四回上海市図書特別賞（二〇一三～二〇一五年）を受賞した。

ここで少し『宋会要輯稿』に立ち返ってみると、徐松（一七八一～一八四八）が『永楽大典』の中の宋代の会要をすべてぬき出して『宋会要輯稿』を作り、その原稿が中国国家図書館（前・北平図書館）に保存してあり、一九三六年に当時の北京図書館（現・中国国家図書館）から二百冊の影印本として出版された。（二百冊は厖大なので、一九五八年、上海中華書店によってそれが八冊に縮印された。）

『宋会要輯稿』は、帝系・后妃・楽・礼・輿服・儀制・瑞異・運暦・崇儒・職官・選挙・食貨・刑法・兵・方域・蕃夷・道釈の部門ごとに『永楽大典』の各会要から時代順に列挙した抜書きによって構成されている。その徐松が抜書きした部分である『宋会要』は張従祖編纂『総類国朝会要』と李心伝編纂『続総類国朝会要』であり、この両書の編者つまり張従祖と李心伝は四川の出身なのである。『宋会要輯稿』が巴蜀全書の一つとして刊行されたその理由はここにある。張従祖は崇慶府江原県（現、四川崇州）の人で、魏了翁とも交流があった。李心伝は隆州井研（現、四川井研）で、『建炎以来以来繫年要録』・『建炎以来朝野雑記』の著者として知られている歴史家である。宋代巴蜀地域は『続資治通鑑長編』の著者李燾（眉州丹棱の人）、『宋朝事実』の李攸（瀘州の人）、『東都事略』の王偁（眉山の人）、『皇宋続資治通鑑紀事本末』の楊仲良（眉山の人）、『十朝綱要』の李埴（眉州丹棱の人）、『太平治跡統類』・『中興治跡統類』の彭百川（眉山の人）など歴史家を多く輩出している。これらの宋代史資料の編纂に巴蜀ゆかりの人物が関わっ

ていることも『宋会要輯稿』が『巴蜀全書』の一つとして刊行される理由を補填している。

いうまでもなく、『宋会要』に関する研究には既に歴史があり、一九七〇年には日本の東洋文庫の宋代史研究委員会より『宋会要研究備要：目録』が刊行され、爾来東洋文庫の宋代史研究を中心に『宋会要輯稿食貨索引：人名・書名篇』（一九八二年）などの工具書が編纂され、梅原郁編『宋会要輯稿編年索引』が一九九五年、京都大学人文科学研究所から刊行され、二〇一四年十二月から東洋文庫では『宋会要輯稿』の食貨篇のデータベースを公開している。[6] 従来これらの研究は主に歴史研究者たちによって行われてきており、研究も食貨部分にやや偏った成果が見られる。特に宋代経済史や社会史分野では、『宋会要輯稿』は基本中の基本の必読書であり、むしろ現在に至るまで点校がされなかった方が不思議なのかもしれない。しかしながら、『宋会要輯稿』は一九三六年の唯一刊本が二百冊という大部であり、『宋会要輯稿』そのものの読解が難しいためか、思想研究の方面からは専門的に研究されてこなかった。近年になって、デジタルデータベースの普及により祭礼に関する記述など簡単に検索できるようになり、二〇〇六年より駒沢大学仏教学部論集にて連載中の「宋会要道釈部訓注」（一～十）[7]など仏教方面から、松本浩一[8]など儀礼の方面から『宋会要輯稿』にアプローチする研究者が次第に増えるようになってきた。このような状況下での校点本『宋会要輯稿』の刊行は、研究者に定本を提供したという意味においても画期的であると言えよう。

筆者の個人的な感想ではあるが、現在進められている『朱子語類』全巻の訳注にかかわる基本的な資料としても、校点整理された『宋会要輯稿』が我々研究者に裨益するところは甚大である。例えば、運暦一～二（第五冊、二六七九頁～二七二六頁）は、五運・暦法・修日暦・修実録・諸儒論三家異同というカテゴリで、各会要から記事を抽出して並べてあり、これらを見つつ、たとえば山田慶兒『朱子の自然学』の天文学の箇所を読んでみると、朱熹が語録でなぜ門人とこれほどまでに改暦について詳しく論じたのか、当時の背景を一挙に把握しうるので非常に便利である。ほかにも例えば、崇儒一～七（二七四三頁～二九三三頁）[9]は、『群書考索』や各『文集』とも対校してあるので、同様の記述がどこにあるのか一目でわかるのは、非常にありがたい。『宋会要輯稿』の校点・校勘作業における具体的事例については、尹波「巴蜀文化の一柱の豊碑、宋代文化の一棟の宝庫――『宋会要輯稿』の錯簡脱漏に関する浅解」

（『中国研究集刊』第六三号、二〇一七年）を参照されたい。

五、『廖平全集』

廖平（一八五二～一九三二）は四川・井研県出身で、尊経書院で公羊学を学び、康有為に思想的な影響を与えたと言われる近代蜀学の代表的な人物である。ここでは廖平については専論[10]に譲り、『廖平全集』に絞って述べていきたい。『廖平全集』（全十一冊）は、二〇一五年十月に上海古籍出版社より刊行された。校点者は楊世文・舒大剛・邱進之・鄭偉・劉明琴である。廖平の娘・廖幼平が編纂した『六訳先生未刻已刻各書目表』[11]には未刻二十一種、已刻九十七種とある。廖幼平の『廖季平年譜』[12]に附した卞吉新編『現存廖季平著作目録』は当時の四川省図書館および四川省社会科学院が所蔵するものに基づいており、それだけでも一〇四種に上る。『廖平全集』に先んじて刊行された『廖平著述考』（鄭偉著、二〇一四年）の研究によれば、已佚・手校本・擬撰者などすべて合わせると七二二種になるという。『廖平全集』では一九二一年に成都で出版された『六訳館叢書』と『四益館経学叢書』とを基礎にして広範に資料を探し、群経類（一七種）・周易類（五種）・尚書類（六種）・詩経類（二種）・三礼類（十一種）・春秋類（十六種）・雑著類（一四種）・医書類（二六種）・術数類（四種）・附録（六種）、合計一〇七種を選び編集した。当然のことではあるが、全書という形で整理され、校点・標注が加えられていると、研究者にとって格段に便利になるだけでなく、従来の資料では気づかなかった問題も見えてくる。例えば、第一冊目「知聖篇」は家蔵本も参照しており、家蔵本では「六芸」が「六経」となっている。

また、日本で廖平は清末民初の思想研究分野で取り扱われることがほとんどであるが、廖平自身は経学研究のみならず、医学や術数に渉る広範な知識の持ち主であった。第十一冊術数には風水書「撼龍経傳訂本注」が収録されているが、これは彼が『王制』『周礼訂本』の形式に倣い経・傳・説に分けて再編集したものである。ほぼ同時代の寇宗（重慶・渠縣の人）が注を施した『撼龍経批注校補』と比較してみると、経書を重視した廖平の学問というものが一目でわかる。『巴蜀全書』では既に『廖平全書』とは別に廖平の『穀梁春秋経傳古義疏』（鄭偉校注、二〇一四年、四川大学出版社）

も刊行されており、これらの資料によって廖平研究が格段に進展することは間違いないであろう。

なお、二〇一六年六月に第三一回全国古籍出版社年度会および二〇一五年度優秀古籍評賞会が開催され、『廖平全集』は二〇一五年度優秀古籍賞の一等賞を受賞した。

六、今後の展望

二〇一六年度の成果として、目録系列では卿三祥『蘇軾著述考』、善本系列では『楽善録』・『唐鑑』・『楊子法言』・『嘉祐集』・『唐先生文集』・『長短経』など宋版を影印出版した。精品集萃系列では、林慶彰・蔣秋華編『李澄源集新編』・李誼校注『韋莊集注』・新編『唐君毅全集』などの出版が予定されている。補助研究系列では、『張問陶研究資料匯編』を既に刊行した。ほかにも四川地域の家譜や族譜・家蔵資料などの調査が進められており、清末の孫培吉の手稿本『大夢瑣録』と『黙室日記』などを『孫氏資料匯編』と題して刊行する予定である。

最後に、九州大学文学部と四川大学歴史学院は学術交流協定を締結しているが、四川大学歴史学院は古籍整理研究所が所属する組織であり、今後両校の交流がますます盛んになることを願っている。

なお本稿は、二〇一六年九月三日に京都大学人文科学研究所にて開催のワークショップで筆者が四川大学古籍整理研究所副研究員として口頭発表した内容と一部重なっている。

〔注〕

(1)『全宋文』は二〇〇六年六月上海辞書出版社・安徽教育出版社より出版する際に補充し全三六〇冊として刊行された。

(2)二〇一四年九月五日『社会科学報』の専題欄「北大本川大本《儒蔵》之比較」。

(3)呉光、「儒学復興、于斯為盛—賀四川大学《儒蔵》史部完編発行」、『孔子研究』二〇一五年第一期、一五二～一五四頁。

(4)貴州政府が王陽明の開悟の地（龍場）に関連づけて誘致した研究センターで、中国国内の十四の主要大学の国学研究所や儒学研究所、および岳麓書院といった儒学関連機関が参加し、各機関が研究者を派遣してシンポジウムや講演会などを開催した

りしている。詳細については http://www.kxtwz.com/ を参照。

(5) 巴蜀全書ホームページ：http://bsqs.scu.edu.cn/　儒蔵ホームページ：http://gj.scu.edu.cn/

(6) http://124.33.215.236/sokaiyo/sokaiyo_query_input.php

(7) 「『宋会要』道釈部訓注」一～十、『駒沢大学仏教学部論集』第三七号、二〇〇六年～同誌第四六号、二〇一五年。

(8) 「宋代の賜額・賜号について：主として『宋会要輯稿』にみえる資料から」、一九八六年。

(9) その項目は以下の通り。宗学・太学・在京小学・郡縣学・郷学・書学・算学・律学・医学・画学・武学・勘学・求書蔵書・編纂書籍・校勘経籍・献書升秩・説書除職　購書賜予・御製・御書・録賢・賜処士号・賜先生号・賜名賜第・勅置守墳・堯陵・経筵・観賞・却貢・罷貢・存先代後・録諸国後・出宮人。

(10) 小島祐馬「廖平の学」及び「六変せる廖平の学説」（『中国の社会思想』、筑摩書房、一九六七年）、李耀仙『廖平与近代経学』（四川人民出版社、一九八七年）、陳徳述・黄開国・蔡方鹿『廖平学術思想研究』（四川省社会科学院出版社、一九八七年）、黄開国『廖平評伝』（『国学大師叢書』第十輯、百花洲文芸出版社、一九九三年）、陳文豪『廖平経学思想研究』（文津出版社、一九九五年）などを参照。

(11) 廖幼平が一九四二年に四川省図書館『図書集刊』で発表した。

(12) 廖幼平編『廖季平年譜』（巴蜀書社、一九八五年）のほかに、孫の廖宗沢が編集した『六訳先生年譜』もあり、『廖平全集』第十一冊目、二五一～三九九頁に収録されている。